

筑紫（九州）の万葉集と風景画シリーズ（第五十回）

けんしらぎし

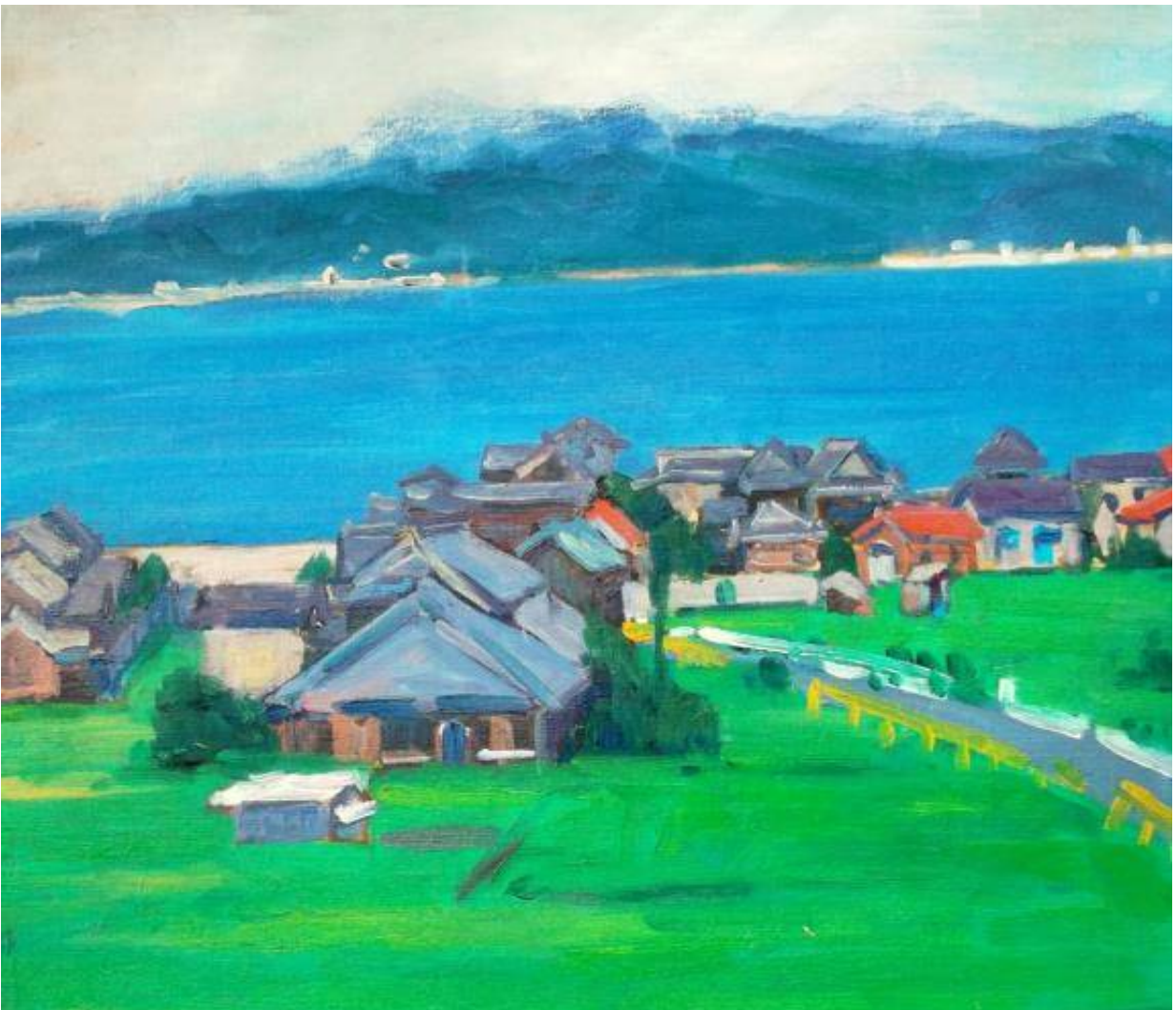
# 「遣新羅使と万葉集（その5）」

くまげ うら  
— 熊毛の浦 —

・天平八年（736）年晩夏六月に遣新羅使人が乗船した船は古来の主たる海上交通路であった瀬戸内航路を西下し筑紫を経て新羅国を目指し難波の港を出航した。

・難波の港を出航した遣新羅使船は瀬戸内海に浮かぶ多くの島々のあいだを縫うようにして西下し、潮流が速いことなどから航海に際し明石海峡におとらない瀬戸内海の難所といわれている現・山口県東部に位置する柳井市大島地区とその南東の瀬戸内海に浮かぶ周防大島（屋代島とも呼ぶ。）の間の瀬戸「大島の鳴門（大島瀬戸）」を引き潮に乗って通過し、次の寄港地へと向った。

・遣新羅使船は周防大島の北西部の波静かな海域で古くからの内海航路の重要地であった大島瀬戸のある柳井市辺りの内陸部から瀬戸内海に南へ約15km半島状となつて突出する「室津半島（別称、熊毛半島）」の東沿岸部を進み半島突端部にある上関海峡かみのせきから半島西沿岸部へとまわり平生湾ひらおわん（熊毛浦に推定。）に至り、潮待ち、風待ちなどで寄港し一泊したあと瀬戸内海を西下し筑紫（九州）を目指し航海を続けた様子が万葉集に記されている。



(写生地) 周防大島 (山口県大島郡周防大島町「屋代島とも呼ぶ。」島内の東海岸近く (周防大島の入口に架かる大島瀬戸大橋から約5キロ南の志佐トネル出口) から大島瀬戸を西へ約6キロ隔てた対岸にある瀬戸内海に突出する室津 (熊毛) 半島の東沿岸部 (柳井市) を描く。(杏 花)

・この半島南側の先端部から西側に廻った海岸部に万葉集に詠われる「熊毛浦」くまけのうらがあるとの説がある

・《日本歴史地名大系・山口県の地名》などには「万葉集」に天平八年に遣新羅使阿部継麻呂一行が西下の途中「熊毛浦に船泊する夜に作る歌四首」が詠まれているが、この「熊毛浦」は、この半島の南端部にある熊毛郡上関町かみのせきと、その北側に隣接する熊毛郡平生町一帯の海岸にあたると思えられる。と記されている。この海岸は沖合いに長島・佐合島さくわじま・馬島など小さな島々に囲まれた穏やかな内湾である平生湾内にあり瀬戸内海における安全な寄港地であるといわれ、古くから長い船旅の途中における潮待ち、風待ちと食糧の補給・給水の出来る港として栄えた。と伝えられる。

・遣新羅使の一行はこの熊毛浦で一泊した後に筑紫（九州）に向かった。

・万葉集には、この港で碇泊中に使人たちが、詠んだ次の四首の歌がある。

みやこへ

# 1) 都辺に 行かむ船もが

みだ

こと

刈りこもの 乱れて思ふ 言  
っ  
告げやらむ

卷十五—3640 作者：羽 栗（遣新羅使）

（解説）東の都に向かう船はいないものかなあ。そうしたら、こんなに乱れて

恋い慕っていることを、言付けてやりたいのに

この歌は遣新羅使が、この港を行き交う船によせて詠んだものと思われ。

## 2) 暁の家恋しきに

あかとき いへごひ

うらみ

かぢ おと

浦廻より 楫の音するは

あまおとめ

海人娘子かも

卷十五—3641 使人

(解説) 暁のころ、家を恋しく思っていると、入り江に沿って楫(かじ)の音がするの、海人(あま)のおとめなのであろうか。

おきへ

く

## 3) 沖邊より 潮満ち来らし

から

あさり

たづ

可良の浦に 求食する鶴

さわ

鳴きて騒きぬ

卷十五—3642 使人

(解説) 沖の方から潮が満ちてくるらしい、可良の浦で餌を求めている鶴が騒いでいる。

・この歌に詠われている「可良の浦」は日本歴史地名大系（山口県）では熊毛浦の一部をさす呼称と思われる熊毛半島西海岸の平生町の南端の尾<sup>お</sup>国・小郡<sup>こくに</sup>の海岸などとされている。また同町の曾根<sup>そね</sup>に百済部<sup>くたなべ</sup>の地名があることから、韓浦（からのうら）としてその付近とする説などもある。と記されている。

（熊毛浦などの位置図）



（参考文献） 日本古典文学大系「万葉集四」・角川・日本地名大辞典

・日本歴史地名大系（山口県）など